勇魚取繪詞

上

十8
3297
1

特 ナ8
3297
1

生月嶋全圖

生月嶋は平戸の属嶋にて城邑より西の方海中二里許にして南北三里許。東西卅町許なり。その形狹く長き湾なり。東南の海は地方に属して浪もなくやすらかなれど。西北は遥に朝鮮ふさしむひ溟渤のかぜ吹あらびて。岸に屏風を立てるごとく削成せるに。もはら洪濤いかめしくよせ来る貌。おそろしきいふべからず。然るに舟かくるの便もなく。人の住處もなかるべし。東南の方にのみ有て。雄浦。一部浦。印崎浦などは其外の在家。まれに船がかりの所なり。此一部浦に益富又左衛門とて代々豪富の者住る。篤實にして温厚にして。漁猟捕ることを産業とし。所々の網代を指揮ふ。

人國の前日春一組。本。冬二組。春一組生月嶋の沖崎。冬春一組の江嶋。冬一組前日より移る。五嶋領の板部。春一組。勝本より移る。合せて五箇所の網代は件の組を出せり。平戸領内にはこの此外小値賀嶋冬一組。津吉浦春一組の漁場なり。益富が指揮ふはあらび冬組。小寒十日前より。彼岸十日前まで。下り鰯を捕るとい。春組とし。彼岸十日前より。春古用明て後廿日許がほど。上り鰯を捕をなす。その経営容易かるべきにて。富有の力なるべし。いとで費用を賄ふ。たとへば財産なりとも。その器量にはるべきにはいとで數多漁人工人を享る。今生月嶋を出て画詞記せるに。此嶋はいるが中に城邑より近くて。事實を見もし聞もし。この網主益富が居住の地にあり。事よく整ひたるなり。圖中西の國船遠見の番所をもとあり。日もとる一所なり。

嶋の島々

ヒクサ
ナゴリ
ミナヤ
クラマ
タカリ
ケイ島

生月御崎納屋全図

益富が祖に道喜といふ者ありて生月沖崎の地理を考へ鯨取業を創てより後今に鯨魚の往来おびゝ漁器の利最多し其はけい嶋の沖を網場とし處々に山見番を置（高処に番屋を居て鯨の往来を遠見するなり）流番を出し（海上二三里も漕出て鯨の形勢を窺ふ物見舟なり）納屋処の体は前の浜辺に鯨寄の場をまうけ屋舎倉庫を建あゝ石垣を築廻して厳く囲ひ左右に門戸を構へ番人を置さかいひの外にも所々に番小屋ありて夜は不寐番人居時く太鼓を打て守の約束なし鯨獲し時は昼夜廻行の者たゆることなく寺衛厳重なり為に建並たる網納屋一宇鍛冶網大工傳等納屋一宇赤身納屋一宇東蔵尾羽毛蔵一宇筋納屋二宇芋蔵一宇塩蔵一宇大納屋一宇油壺場一宇小納屋一宇小納屋蔵一宇骨納屋一宇

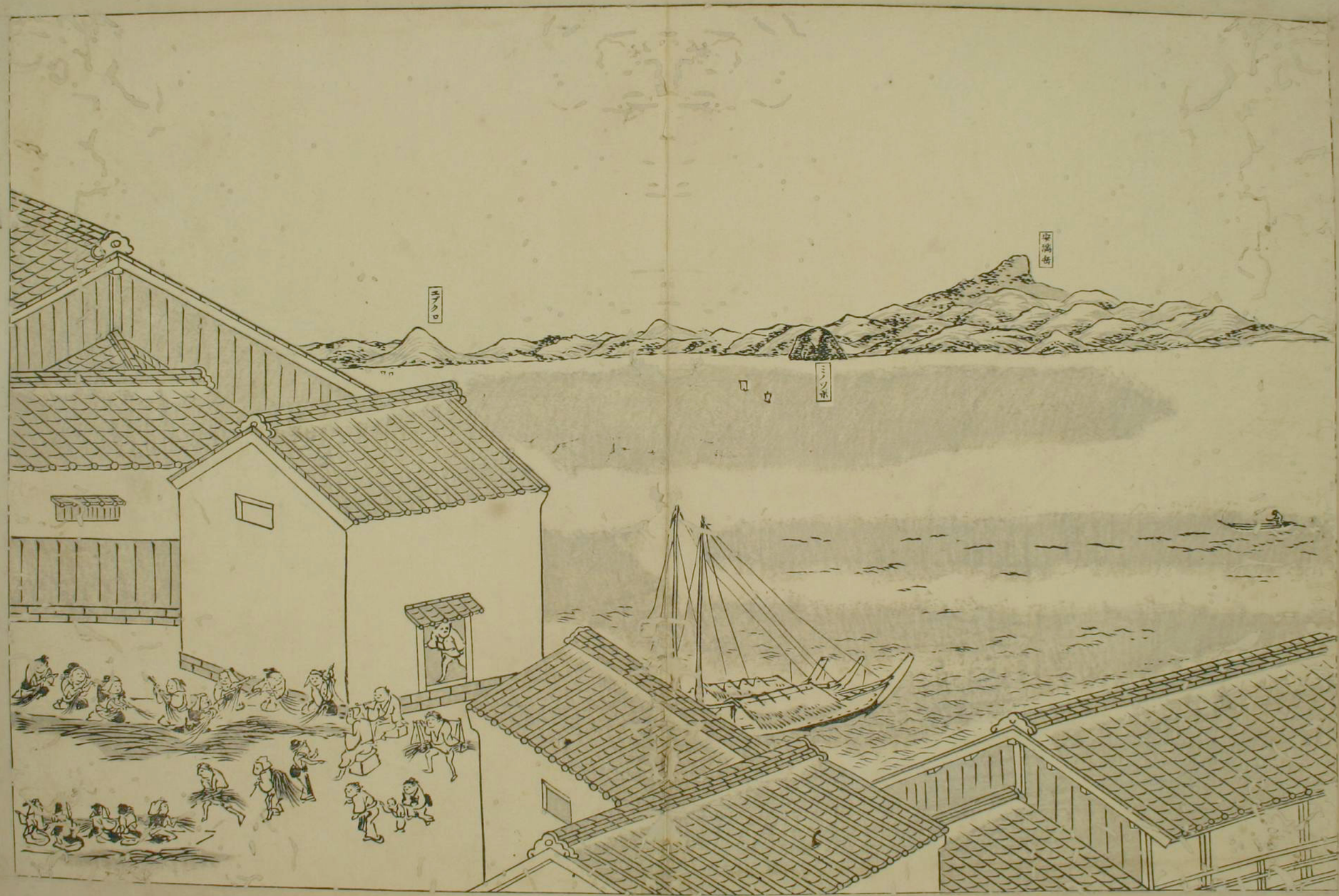
宝納屋一宇六工納屋一宇道具納屋一宇米倉一宇新筋蔵一宇舶来品一宇油貯小倉一宇油貯六間倉一宇荒物貯八間倉一宇羽指納屋一宇加子納屋三十宇轆轤八箇おなり折鯨取術は地利を察するを至要とし地理ならびに労かく費なくして功多く利厚し地利とは鯨魚は往来多く網張に便よき場をいふ背美鯨は海底十八許尋を限てそれより下にて没されば沖中の深処にても網して取るれど座頭鯨長須鯨などは浅き底をも往来するなり

その網の丈の及ぶ程に応じ十八許尋の網の海底に及所を撰て網代に定め背美はみなゝ座頭長須などは浅きやうに構へなり次に鯨寄の場納屋雑舎の敷地船懸の場山見番流番の處薪置場網乾場等の地理を察するもまた神とするなり

大納屋
門納屋
小納屋

生月一部浦芋綯圖

一部浦の組主富冨。自身は節倹を守りて。其居地より酒倉を建て。日用の酒を造らしめ。大工。捕屋。鍛冶。壁塗。すべて職人を招きまねいたり。又は才藝の食客。内外科の醫道。すべて招集して。よくこれを遇るゆゑ。遠方の名人風士も。親漁のために来りたり。よろづよりもとめぬるとなり。濱辺より高く石垣を築て。風波の難に備へ。一族。子代。數百家軒を列べて。市巷をなし。嶋中の民をもふりて生産の便を得たり。子代の中より長に。大別當として十許人ありて。こゝ院廳の重職の名を犯せるに似れども。百事変遷の後世。遠國辺土の称呼なれば。是一位を文配し。万事執行し頭なり。別當子代は。他行にも必僕從あり。居家にも必數膏風流の心ありて。尋常の漁人のたゞにあらず。毎年八月より芋綯の營をもつとむ。そもそも一部浦の民家の婦女をはじめ。一人より二貫目充の芋を與へ。倉中にてもとめ。婦女はおのゝ家に則て。日たゝさるる間にとゝのゝ綯出る。こゝ婦女の生産のゝ多きを。男子をもて交ることなし。綱綱轆轤綱胴縄根芋。がくしもも。矢縄。突出し。下芋。もゝ緒。たゞひ。小附縄。くさぐさする中に。綱綱はいとをして。造るにたやすからず。備後國田嶋より。その術を堪たるものを呼ぶし。既より婦女はかの小綯をさを集合せて。御崎の廣場にて造らしむるなり。此御崎組の芋惣て一万六千余斤なりとぞ。此中一万二千余斤は綱縄の料なり。三千斤は調度より附る縄の料なり。


ヨブクロ
安濃郡
ミノノ郡

生月御崎納屋網化圖

八月中旬より。備後田嶋の者五十余人下り来て。御崎納屋場にて。網化いとひ網組をもとめ。翌年の春網で逗居て。双海船の加子ともなり。双海船とは二艘の船双て。海上に一結の網を張ゆゑの名。網張もざなどもそろふ。その中巧者一人を網大工と号。常に納屋より居て。網の修繕を役しむ。抑鯨網一組は三結なり。一結は三十八端なり。一端は竪廿五尋にて。張延はば十八尋四方なり。此一端ごとの端と端とを。亀ば菓二本絢たるほどの細き縄して網の目おとにぬりそめよ。惟とめ。都合十九端継合たるを。双海船一艘に積なれば。一結の舟数二艘なり。鯨を見出て網をとり。彼小舟。双海船の艫の方を寄合せ。合結たる十九端の網の端を。紐縄にて結合せ。さて西方へ漕引まはし。張廻るなり。こゝ一結にて。おもを中央。左右。三段に備て張を一組とはい廻り。網は新網。二年網。乃二種なり。其作やうは次第なり。新網は。最上の一段は三年古を用ひ。二段は二年古。三段は新化。四段は二年古。五段は三年古。六段は四年古。七段は五年古を用るなり。二年網は。上の一段は四年古。二段は三年古。三段は二年古。四段は三年古。五段は四年古。六段は五年古にて。新化を用ゐ。かく輪轉して。六年目は古くなりたるを。彼換る。中段を新作とすれば。鯨の觸當るおもれば。下段は古を用る。海底の岩石などに絡まる時も。鯨身の觸懸れるを抑留せば。ともやとくきれ離れて。破損中段以上は及ぼさる用意。若下段の網強して断絶まざれば。損害上中段へは及べからず。

カゾス
綱ウチ
綱ハキ

生月御崎納屋場前細工圖

例年八月中旬より船化事を始る。一年に艤る船三艘持双船一艘双海船一艘ずつ新に
こしらえ輪轉して古きを捨る。船具もみな揃い一組ずつ備る船數左ふいのごとし

艤る船二拾艘 一番船より廿番船にもるまで次第を定む

一艘分の調度 楫一 艫八 櫂一 艫板十六 納子十六 早緒十六
四段帆一 帆柱一 合鑰一 苫六 水桶一 羽釜二 鉄風呂一
山刀一 鑿一 印一 小指印一 竿一 飯桶一 柄杓一 柄長一
火床一 水竿十一 萬鍔二 羽矢鍔二 剣一 鑢子一 手形切一 根芹一
ぐい一 もつ也三 突出一二 矢縄二 長柄一 此長柄を一番二番三番船にくばりて持こたり 明松數不定

持双船四艘

一艘分の調度 胴縄二 澪搦二 中搦二 瀬附六 障子釣二
持双柱四艘に二本用ふ ぐい五 此外の具も艤る船にはなし

双海船六艘

一艘分の調度 綱十九端 投もやひ一 漕柱一 漕綱一 鉄碇三
尻掛一 胸掛一 水越綱一 此外の具も艤る船にはなし

双海附六艘 一艘分の調度艤る船にはなし

組立の乗船一艘 調度艤る船よりはなし

納屋船二艘 一艘分の調度艤る船ふれなし

納屋傳同船一艘

合して四十艘。新造或ハ修理船を交用ふ。丹白粉墨などもて塗いろどりこれの
紋様を著。是ハ諸調度に救急替用の設置有て実に多く益辨の用意といふべし。

松其藏
雙海船
雙海附船
六双船
笊子船

生月御崎納屋場前細工圖

組出以前にて諸職人かいろ〳〵調度の支度をなし。或ハ扶持米を搗。

或ハ納屋を修理したゞ。其外勘定いそがし〳〵。その〳〵用の品〳〵。

船 前より記せる

帆柱 三十四本

持双柱 四本

剣 四十五柄

小切庖丁 三百枚

鑰棒 數不定

鑢 五十柄

突出し 二百八十本

風爐 五十基

たゞい 三十尋形 三十把

煉釜 四十五口

炭 四百俵

油入料樽 二ヶ

筋桶 數不定

風炉桶 數不定

網 百廿三端

桁 五十本

鱈床 百箇

手形庖丁 四十枚

斧 數不定

万力 數不定

根蒔 九十房

釜 百廿口

帝皮 三ヶ斤

鉄壺 廿五

米 組出中の扶持 二ヶ五百俵

塩 二千俵

水桶 數不定

手洗 數不定

胴縄 萬柄 ヶ本

古網かゞと 百房

輪輪綱 廿五房

輪輪 八

薪 百五十万斤

味噌大豆 百俵

立延 五ヶ枚

炊桶 數不定

芋 一万六ヶ余斤

鱈羽 五百四十挺

合鑰 四十四本

入子木 一万五千斤

大切庖丁 數不定

下芋 五百斤

小附 廿五房

苔 八千枚

酒 百六十樽

菓履 一万足

もゝせ桶 數不定

羽矢竿 三百本

矢縄 百廿房

帆 廿六張

水樽 廿六箇

萬鈎 百五十本

拂庖丁 數不定

阿腹剥 數不定

早芋 二千筋

太鼓 五

切桶 數不定

柄長 數不定

帆 三十四枚

羽矢鈎 百五十本

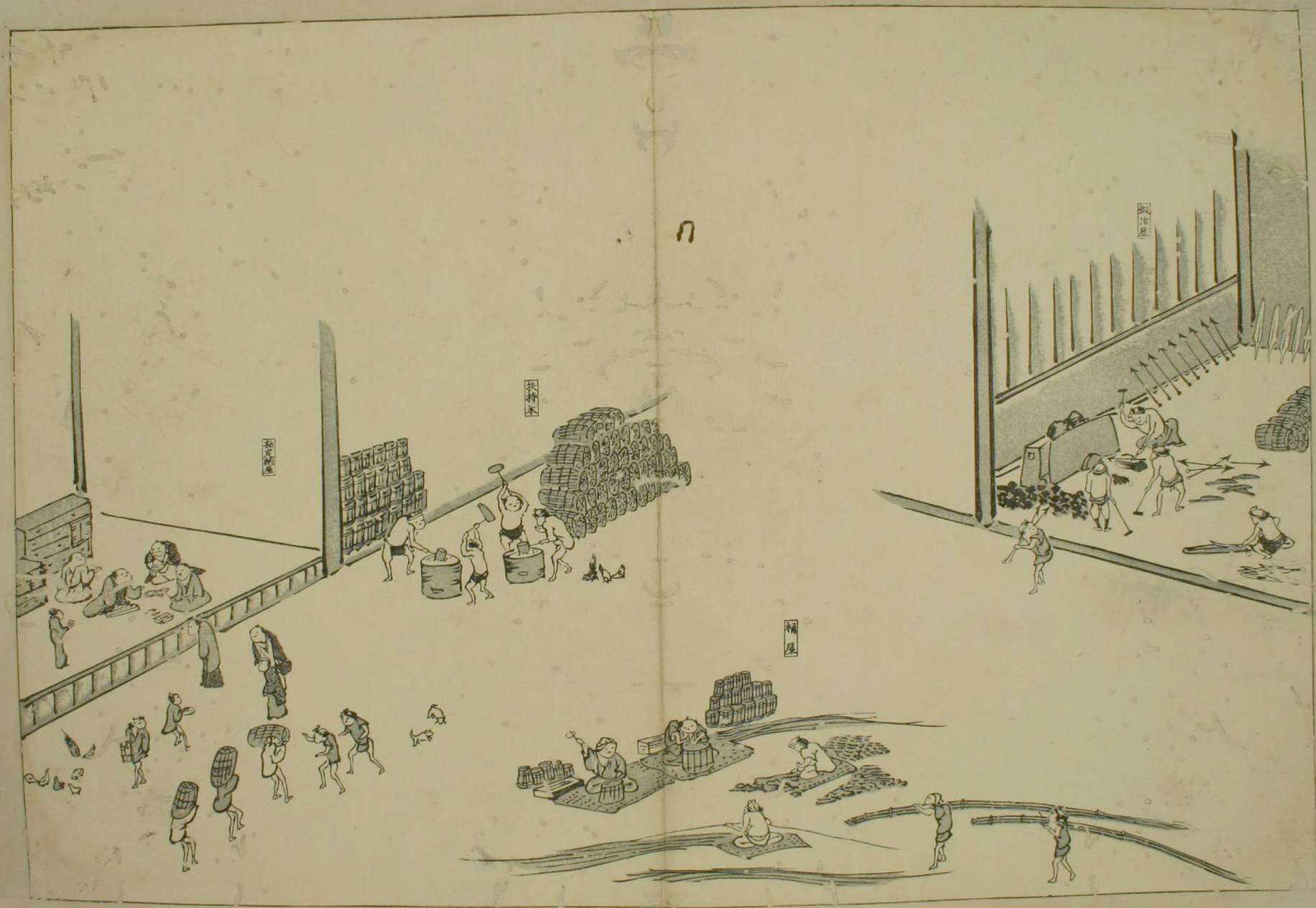
鑿 五十柄

鈎竿 八十本

此外よもさまゞの調度ハ。細小なる物ハ記さゞ追おけ申さゞ。

已上前細工の条に記せる船具ハ。御崎一組分〳〵。壹岐の四組ハ大網代なれ。調度もまた。御崎より三双倍

ゆえ。大村の江の嶋。五嶋の抜部。そとムもまた。あまゝの調度ハ推察ス〳〵


鍛冶屋
扶持米
桶屋

生月一部浦益富居宅組出圖

例年小寒の節の前後。十日許の間に組出されば。かねて其分ぶすをさだむ。

大別當二人　別當二人　若衆五十人　帳役三人　奥切十八人　筋こ紀十二人

飯焚二人　茶廻二人　支配人八人　骨油掛一人　番人七人　大工三人　鍛冶一人

桶屋二人　網大工二人　羽指三十人　同見習三人　鯨舩加子四百四十人

都て五百八十七人。汐崎に出張居るなり。羽指と云し舩の舳先に立。萬鋒を仕て鯨を突。鼻のもやうじを切穿て綱をけ。海底より没鯨の腹下をくぐりて。此方彼方へ胴縄を引めぐらしを捷術なり。其所為詞に述ぶくしがたし。勢子船の一番二番三番舩の羽指を各親父とて。麾を執て總て舩の進退を指揮するものなり。又双海舩六艘に乗たる羽指の中にも。網元の親父とて一人麾を執るなり。網をとりこくしを時指揮をなす。此二人の親父をば舩子共最崇敬す。

又幾子舩の才四番の羽指を宿元と云。親父より立たる者。其以下次第にて。見をくらし男を役割といふ。組出業にハ。組仕出祝とて。益富が宅に集て酒宴を設け羽指曜を。て門出を賀ぶ。これ小寒その前後十日の間に。丑日を撰び。人法して。一部浦を舩出し。舳先に牛角の紋の旗印を立。仕形声とて。鯨を捕ひし時の注進の様をもて。太鼓を打さらぐこと。舩を漕廻しそかにげーの岳の方ふ向て遥拝し。又一部浦より齋祭をする某の宮居を拜しそさそ汐崎に居ること百五十日許なれど。人〻舩路なれど馬のもれむけしそ互に名残をしめり。抑組出に丑日を用ひ牛角の紋の旗印を立るハ。牛の鳴声をもうとをいひ。角ハ物をよく觸突とて。義をとりて鯨をとり突うと云名詮なるべ。

組出業に小寒四五十日以来より。ようく鯨性未をひきて。クラニナリ。二本に番舩を置て。鯨を見出るまでにやがて一部浦より。双海舩一艘二艘舩子の舩

さ。けとの使舩ハをいはし。来出し掛捕ケ月。

生月御崎西沖下鯨見出圖

西海の方言に上鯨下鯨といふことあり。冬天に北海の寒氣を避て南海に
うつるを下鯨といひ。春暖の時。南海より北海にうつるを上鯨といふ。其氣先荒して沖中を
群を通るを。追多ち捕ることやすし。春陽より匂て物音を耳にも
聞いまだ。網に追入てもさかれて孫を。そ中常に脊美座頭。
長須児鯨の四種を捕ことにて。他の鯨はいとめたれたるり出ていべくもれ。ぞに
載たる圖は。伊崎の西の沖中を。脊美が下るを海へ脊美が水面に浮游ざ汐を
吹ことそのさ二向許すて二筋よりそれ他鯨より比はまだ息際短く。向もるく數吹出る。
山見番これを見出はまだ。傍ふたる柱に逆印を揚。逆四枚續の帆の白なるを。立柱の
烟をとて合圖をあん。さて燒る船双海船。持双船及番船風波をも。なべ漕出て。
西しく脊美を見定むるまだ。

ひらき 生月嶋。番船一。なごり 同処。番船一。くくり 同処。要ま船二。持双船二。番船一。たより 同処。谷土用明の ころより 番船一。京嶋 同処。双海船六。双海附船六。勢子船三。持双船二。風波の節に前タカリ。旦那山 同処。伊崎の後へ。春狙十四五日前より 番船一。いろり山 同処。バンダケの後へ。春狙。番船ぬし。馬の口 大嶋。番船ぬし。大賀 同処。番船二。白崎 同処。番船一。崎瀬 多久嶋。番船一。神崎 同処。風波の時に 横嶋番船一。

勢子船双海船に天氣に酷ひて。けい嶋。くくり。前たり。辺にをり。羽指一人。艦押一人。
山見番所に上りてうかがふ。又流し番。そはけい洛二神の間に五艘。日和なれば五里許
乃沖より。陸の方へ殷に並て伺居る。春はたりの沖より。對馬を見渡しの向に三艘。
日和なれば二里許沖より。陸の方へ殷に並て伺居るいはゆる。夕暮にて地の方へ漕
帰るこまより。極て下鯨の通路三処にあり。大嶋の沖より来るを大谷入といふ。大嶋と
多久嶋の間より来るを袴瀬戸落しといふ。多久嶋と神崎の間より来るを
田ノ浦れとこといふ。その圖は大谷入をうけ〜をるなり。

對州
壹州
富士ノ山
小フタガミ
大フタガミ
大シマ
ヲダラシマ
タクシマ
ヨコシマ
神崎山
春見館
勝子船
ケイタ山見
ハンヒロ山
タカヤ山見
クラヲ山見
觀火船
双海船
御崎浦
ナゴリ峯
ヒタ峯

上月御崎沖座頭鯨網代追入圖

座頭鯨は脊美より息際長く。潮を吹こと一筋にて。海底深く潜ちるゆゑ。必網代に追寄て捕ふと形り。先座頭を見出すと。印を艫に立。

長須もまた次第に増りて深くなれば。息際いと長くて。潮を一筋ふいと高く吹切やうに吹上るなり。扨また沖中深処にて。網の丈及隼

數多の勢子船。各八挺の艫を押て。疾鯨をとり巻。網代近く成まに。船配をして。其間五六十間許より並び。攪棒とて二尺許の丸木を双まに持。表の舷を敲き。岡を伝りそろしき荒浪の上をあらもせぬ。えい

えい声を出して驅立る。親父麾を揚て指揮と。右を指ば勢子船右を廻て左へ廻り。左を指ば左へ廻りて。鯨の逃ぐる先を遮りぬ。網代近く追寄て。おやひとかうぐ。一番親父合圖して。二番。三番。及網戸の親父ふ。網を結合せ麾ささよりをとゝしむ。其合圖し双まに持たる麾を組合せて見もとるなり。さて網を張べきよりの合圖に双まの麾をさし揚まば。双海船一結二艘ば艫を並べ。都合三結六艘の者ども待とりて。十九端の網の端と端とを。小縄もて引りて結合せ。漕別まして張廻るなり。已に網代の条にいへるがごとし。此時四人の親父の中。一人にても諾どして。双まに麾を揚ざる者ゐれば。双海の者網を張ことなし。そのこゝろ

ゐるんこを恐てなり。中央の一結をば網戸といふ。これ鯨の向べき正面なり。左右の双海の網ゝ半余網戸の網に重て張ゆゑ網戸の処、一重。

右ハ二重。其次ハ一重なれば。鯨正向ふ追入られば。三重の網を被るなり。

薩州
大タタミ
薩州
十二
小タタミ
親父船
子連れ船
座頭船
大筵子船
ケイ嶋山見
鮪ヨリイケ
鮪双船
州薩船
タタラ山見
石船子船

生月御崎沖脊美鯨掛取鋒突圖

數多の逐船勢子鯨船を取巻驅寄て。網代二三町許にたれし。双海船六艘各二艘ずゝ艦を合て都合三結なり。三段に備て待受たるが。親父の相圖を應じて左右へ漕別る。三結の網を一時小張渡を。勢子船は前の一方を除て。左右の三方より。例の艦を叩き。興を作り。驅立れば。鯨はせんかるかく前面に逃て。網に羅り狼狽騒まゝに結合せる細縄断て。網幾重とかく首尾躍にまゝひたくを。絶まぐ逃まんゝ。逐船の圍の外へ泳出。潮を吹て息ひく處を。逐船小透さじ鋒を突。これを一番鋒とゝ。脊美座頭長須。共ふ網代より追込作法もかくのごとし。中に児鯨小性質剛く利して。驅声にも恐まじ。網代よりも入とかしたとへ網ふ羅るとも。荒悍なれて網を損ふ故。わかくも網ふに追詰。鋒而已にて突て捕へ。脊美は第一の上品なれば。こゝを賞して本魚といひ。自餘をとゞ雑物とゝ。脊美一本の價。雑物二本に相當るだたとへ雑物を取巻たるとても。脊美を見出まゞ打捨て。脊美ふ取掛るなり。東初鯨を見出て勢子船等追寄る時。其品によりて船印のかゝりかゝりそれ追にもゝ細かゝりて。諸鯨一様なるゝ孫でなり。

脊美　船の舳に印を立ゝ持なれば水掉まさ苦をかけて艦より流たつるなり。

座頭　船の艦は印を立ゝ持の時は水掉まさ苦を挑て船の舳に流立る

長須　艦より小指印なりを立ゝ持の時は小指印の下に白藤を負て立るなり。

児鯨　船表に印を少しかゝぶけて立ゝこれをノンコとゝ立ゝ持の印なり。

山見番ゝ出たるなりも。脊美なれば相を二処揚。雑物には一處揚なり。

又鯨の泳行方に印の烟を移ゝして。相圖ともなることなどもかゝのとなん。

春ヨロヒ
刈海部
刈海部
観火船
観火船
特双船
一番見入船
刈船

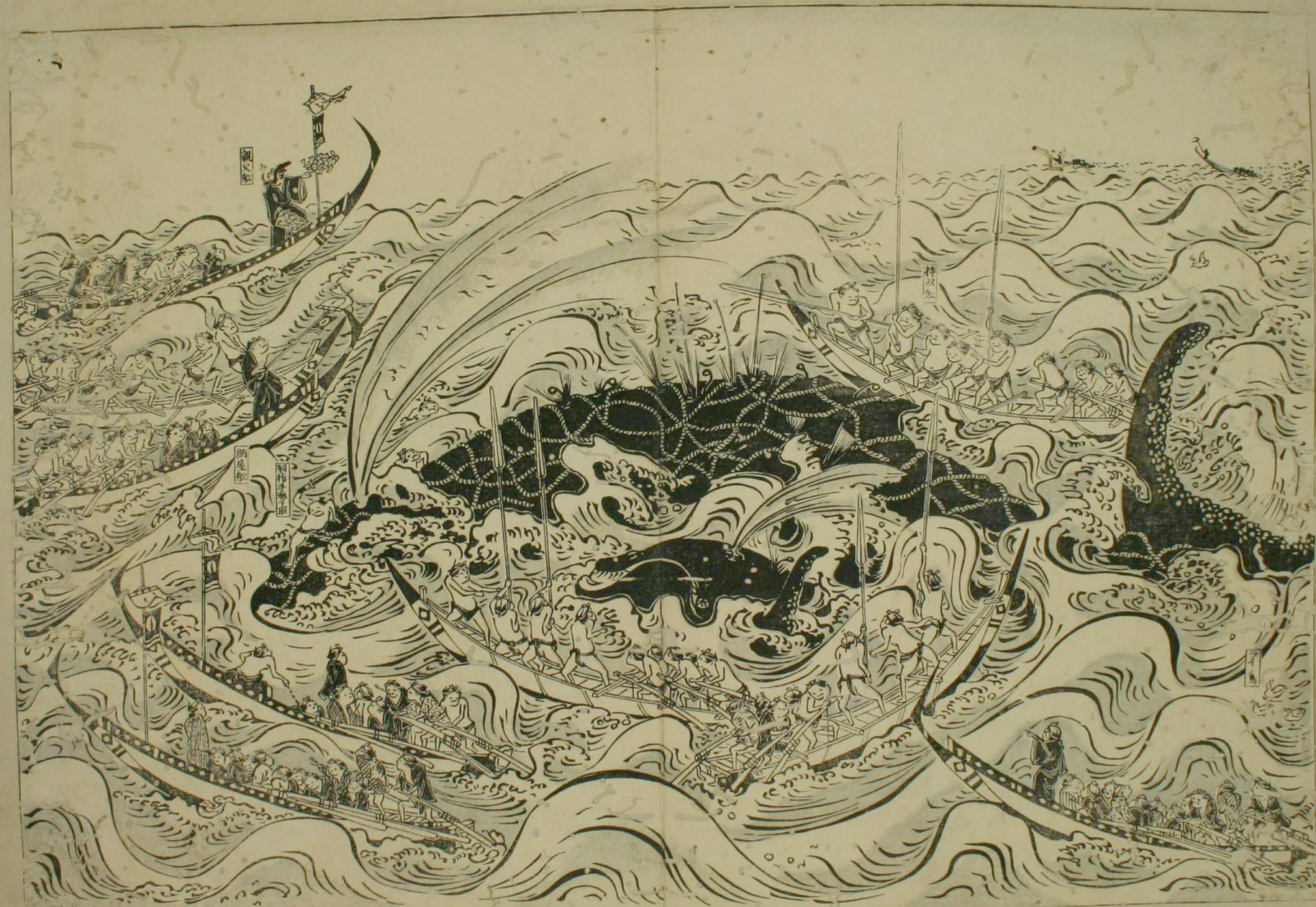
生月御崎沖沓美鯨一銛二銛突印立圖

鯨奥網より罹ぐるなか逃まんとて。船の圍の外に浮出息ついき潮を吹時我方らじと漕よせ。羽指共表に立上り。銛を捨て。四五間隔まるまに投突ぐ。万銛ぐさと鯨に立。一番万。二番万を突て。船の艫に印を立てぐ〳〵万を突わどに。二三尺。或は三四本に及べど。鯨海底に没逃る。此時万に著たる。根芽かぐもも〳〵せ。なほ又縄を。數十尋継て。其引行ふまろせ延し居るなり。万は生鉄にて。鋒無なれど。曲まども折ぐ。引ども抜ぐ〳〵て。鯨奥いかまれども逃てくよし。〳〵。さて間なく浮出るもいろ。半時許経て浮出るもいろ。鯨出ぐ。なの〳〵汐はけて万を突立る に。弱り苦て。そのらなる出る雷のごとし。海面も血に変て。朱色の波浪立さぐ。かく苦痛の時よも。性質柔和の奥にて。就中脊美く穏しけれど。狂觸て船を害ともあり。鯨海中に没て逃行随ふ舟を引せ。もく〳〵ひけ〳〵上に顕るたびに。万を投突〳〵。かくて弱らぐ剣切せんと。刃先を決て待設たるハ。多もひゆふなるもなるそろし。剣切とは鯨の網よりまもれ。銛に突まて。弱たるをえて。羽指ども持双船よ乗移りまごに剣をもて突ふ突をうる。鯨の性にゆりて網近く追寄ても。えからねをば。羽矢銛もて突に驚て網中に泳入ぐ。又網を破て逃出るをば。追かけて羽矢を突よ。驚忌ひ。躍躍慶を変留るが。なほ柄ちりとおの〳〵てげみ。慶美の禄をも得ぐ。

土月御奇沖座頭子持鯨剣切図

鯨はるを行りゝ情深く就中座頭鯨と景切なり。子持網に〻〻
こ時も。先子に万一奉突ぶ。ひ網もて船に繋留るなり。かくもれば
親鯨網を通りて二三里許隔るとも必立帰り子のうなる者を角。
傍をもかまび。鰭にて繋縄を打切んとする中。又網を張廻し。驅寄
て捕得るこ。若再網を逃ることはなりとも子死ざるほどは幾度も立帰
て救んとし。其死子をを知ては思切て打捨逃なり。又狭子として。
雌雄の間に子を連たるなり。漁人これをみては先子に銛を突よ。息
弱りてそ。も助らじとなれば。雄は見捨て去れども。雌は鰭力
上に載て憐いたみ。夜の鶴の子めしもかひなし

されば。又兒鯨の子持は。性荒くして。網を損ぜ。特而已にてすむ
その子を突。次に親を突。おいみ〻〻狂廻るを。數艘の船追かけ。方
を突立るなり。此時親兒鯨は船を子とゆゑ〻子兒鯨は船を親と
まぎへて。船底より突觸。船打り〻〻毀ることなり。さて剣切をるに。剣切の
已に上の股ふいあり。肥たる奥にて百余処も突き。痩奥二三本にて死もるも
なり。死子れば沈鯨ともなりて。人力に浮揚がる能ゆゑ。半死半生の
時。羽指一人。手形切庖丁を執て。鯨の頭上に飛乗。その運動随ふ浮
沈して。潮吹鼻の障子を切穿こ。これを切穿て。庖丁を頭上に指上合図と
もれば。又一人の羽指。まゝ障子の網を持御中い飛入切穿たる所の六ッ網を
手通り。滑り船に繋ぎ。沈鯨よりゝ〻ざる引の溢合。こみること。肝要とゝ〻


御父船
御屋船
同御手船了服
持双船

生月御崎沖持双船鯨掛挾漕之圖

手形切の穴に障子匂の綱を通し。船に繋留め。鯨の脊脇腹の
ゆたりに。數多劍を突に。臓腑に及ず。其口より潮入て。水面に泡立
浮を方言に湧といふ。さて鯨の半死半生の境を見極め。麾持親父
相図して。持双船に掛べきよりを示せば。達者の水練の羽指ども。綱を
持て海中に没羅りをる綱の目を察し。甚捷鯨の腹下を泳授胸の
邊及腹二所ふ胴縄を巻廻して。浮出る時。二艘の持双船。左右より鯨
を挾み。持双柱一本上に折渡して。綫の如く組合居なり。羽指共し
數人鯨ふ騎て。例の貫廻したふ胸腹二處の胴縄を。此持双船ふ繋
陪るを上の胴縄下の胴縄とふ。其後劍大切庖丁などもて突殺す
江中ふ死せんとして。身を伸し。大息突て一声啼。船に繋置たるが
二三遍廻り。喉をころ〳〵と鳴して息絶るあり。かゝる時にし漢人同
音に。南無阿弥陀佛と三唱し。三國一ヤ大脊美捕たりまいたと謡ふ。
又綱を十分に被ざる鯨し。こゝ狂廻りて。尾鰭に波を打激若船に
觸ては。船微塵ふ碎く。唯其激風ふ觸ても。船覆ことあり。扨劍切時。
いまだ弱ざるに。手形を切。胴縄を通し。持双船ふ搦付ては夫より
狂廻りて。二艘の船を負がゝ。二三度も海に出没し。船も粉のごと
くに成。されど漢人は疾海ふ慣へ居ては怪我なし。かゝるをりのゆふ
設置の持双船ふ繋替るゝ。鯨を突止たる後は。持双船を登にして。二
艘ふ引綱を著。十余艘の船ふ行ふ列うを。沖崎佛ふ引寄るなり。

生月御崎浦鯨網取漕込圖

沖中にて鯨奥を持下海持双船二艘乃間に挟繋ぎ。數多の引船表示印を立。二行に列りて。沖崎浦に寄来り形勢いとあちらげに見ゆ。其間にも他鯨を見出て。山見番例の笹印を釣上麾を振。或し烟を立て合図ともなすこれを見て。勢る船手別をし。今乗乃鯨を目にかけ。追行ことなり。鯨を挟繋たる持双船も。漸くに漕寄。沖崎陽近くなれば。船声を揚。れめきさゝぐを用納屋場乃者數百人。えりやれうと。太鼓を打て力を合せ。聽て傳間船を乗出し。受取として沖番乃者。奥切を具し。大切庖丁などいかめしく立ならべ。二三町許沖にて。鯨を受取るよりして附添。その法事約て。濱辺にて引著るなり。かく鯨を引し跡に。海面血水深て。朱色に変るに。鳶烏鴎鵜 正治百首 などいくとも多く群集りよりて。鵜もいく鯨を啄て。遥き沖中より。鯨に附集ひ来濱邊にて切捌時ふるの肉を一ッの鵜して四五斤許くらふ。されど漁人共是をえびもとて号て鍾馗といふ。肉をくゝ毒ども逐うたことなり。そもくらいの鳥といへるは鯨の来るよりを表してよ毒る名なり。越の白山にも鵜乃鳥ありて後鳥羽院御製に。ちゝ山乃松のこかげにかくろへて毒にさとめるらいの多。ここにみたくなり。白山のと漢土に松鶏雷蒋などゝ鳥の類なり。今の鯨を捕めるを信天翁にて 典籍便覧 小窓雑筆 別

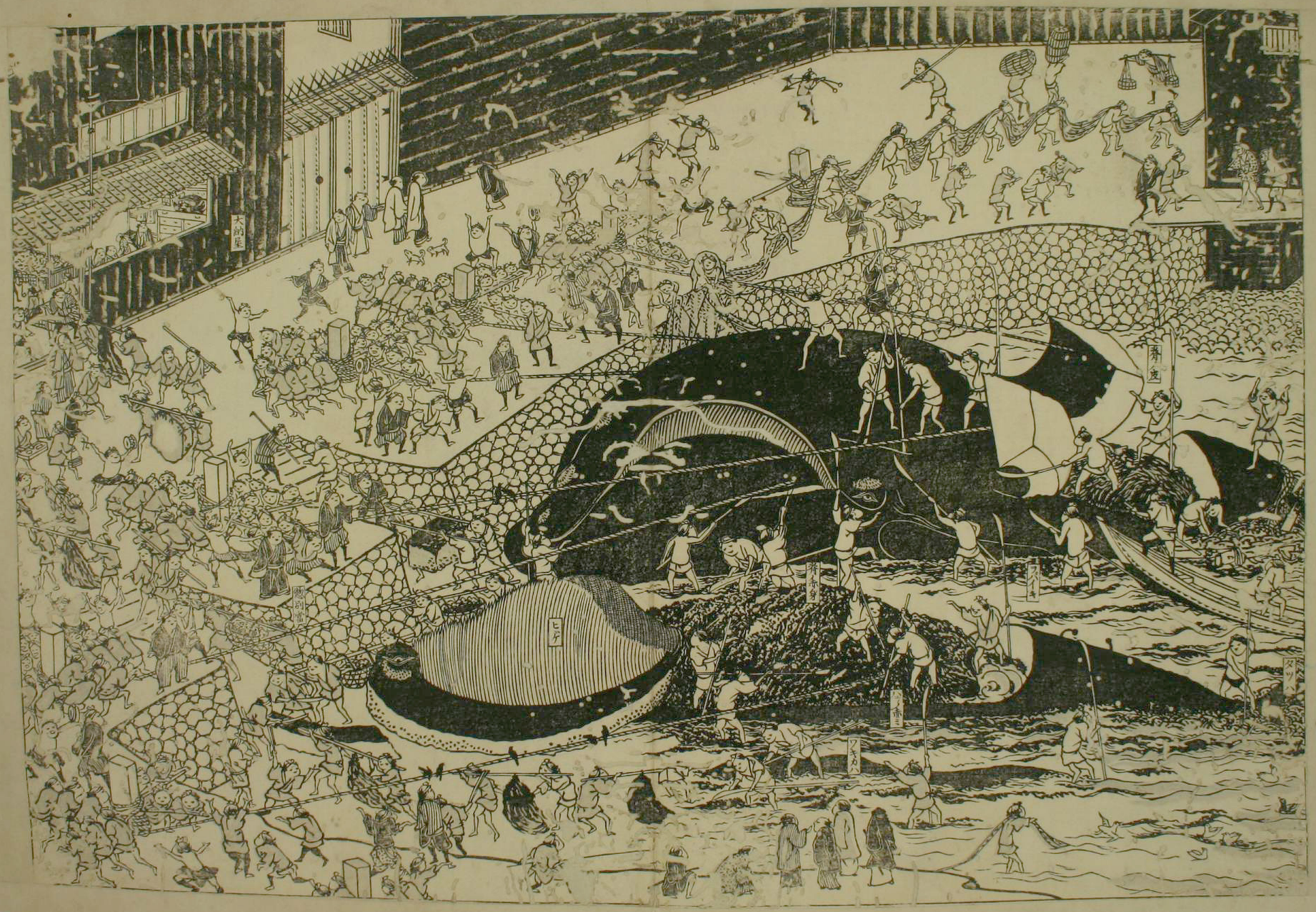
生月御崎納屋場脊美鯨漕寄圖

鯨を持双船の間に挟み。濱近く引寄れバ。轆轤綱を着て巻よせ。結附たる持双船を解放し。前左右に轆轤を用ひ。鯨を自由に振かへ。勝手よき方に向て。綱を取退。扨て脊美。座頭。児鯨ハ。潮吹穴の際より大骨と丸切の堺までを量て。丈の長短を定め。長須ハ頭の端より尾先の三ツ合までを量て。丈幾尋と定るなり。それより魚切親父が指揮を受。本魚切五六人。大切庖丁もて。作法のごとく切初るなり。濱辺に引寄ても。傳馬船より受取て。轆轤綱を付ざるほども。持双船を解放さず。脊美ハ性質穏なれども。長須などハ健剛ければ。綱に罹る時も万穴なども突おとして。直に手形を切。胴縄を通し。綱のまゝ擱て。持双船に挟結附。剱切の者。通鉾を切突て殺すなり。一種白長須といふハ。別かごとく持双船に結付。惣船を筏のごとく組合せ。轆轤に引上れバ。剱もて突殺すなかく。剱切間静に死たる真似して。持双船に結附し後。荒狂ひ。綱を破りかゝる綱を引切。船を害ふ事あり。或ハ納屋場よ引よせ。死了ぬと思ひて。持双船を解放せし時。沖を逃去ことも有しとまゝ。古来納屋場の轆轤綱して繋留ざる中ハ。捕得たりといはざるよしなり。かく空死して人を欺るハ。鯨にも限らず。狐狸猿猫獺鼠をはじめ。鳥獣虫魚の生類に多かる中にも。余りにもやく穴死して却たゝへは鯨るいもあるに。鯨魚の持双船を解放まで苦悩を忍ぶるハことよなりと云へり。

特双舟
小納屋
大納屋

生月御崎納屋場脊美鯨切解圖

納屋場の前濱際小鯨を引寄るとて。大別當をとりてめとりし妻多居合分掌の者どもこれを勤しみ。日雇頭の者其日の鯨の大小に應て人切を憑り日傭を近村より召仕へ。鯨を剖割る四断の法あり。第一に頭鼻の下より目の下へかけ耳を限て切離てるを頭といふ。第二に頭の下より胴の中だるに至て断切たるをいふ。第三にその下より大骨の処を切たるを大骨といふ。第四に大骨の下より尾際に至るまでを九切といふ。此四断よりまづ解に次第あり。第一に潮吹より八寸さげ耳の下に廻して皮を切ちがめさて棚を切。第二に左右の脊皮を九切の深さ剥ぐ。第三に小皮を剥ぐ。頭の皮と第四に脊の赤身を取。此肉を脊筋と五八の脂皮を剥老と云ふ離とも。第六に頭を切離し疑嘗舌を取。第七に大骨小切を切離し。其肉の臓を巻出す。第十に尾羽毛三合を切離す。以上の十箇事八本奥切六人の所作。第十一に敷皮を取。第十二に刑の元を取。此二箇事は中切の所作ふして。大段を切離たるを中切の者とかるべく切捌て大納屋小納屋骨納屋筋納屋にてどろ〳〵しく荷ひ納る。此間近里の者濱辺に寄来てみそこに鯨肉を盗取を間太郎といふ。いかよ禁止ともとかくして懐に入れ腰にまとひ。陰處よさへ挟持たるを。彼宇治拾遺に大童子が塩引腰より捜出されけんなどおりひしのまきれて。いとをとらしかへ割割荷擔の者集りて。山のごとき大奥を。見るが内に跡もなくとり運るはその作法いとよく馴たるまでなるべし。



第六 大納屋圖

大納屋入口の左屋より表間口七間奥行十二間半の苫葺の假屋を建續漁猟休止の間も打毀し。て用ふ其奥に奥行十二間半の苫葺の假屋を建續漁猟休止の間も打毀し。又其奥に油倉をさて此大納屋より脊皮脇皮丸切頭棚端尾羽毛掘舌脊の赤身所たけ。たけ。などを種々取納て。とかくもとる。皮く細小に切て油を煎尾羽毛もテイラ。肉も赤身などを号塩漬にもくるゝと。食料のためを。商船に附属て。諸國へ廻賣し。此外の油に成ぬるを悉油を煮骨をも骨納屋へ送る。又丸切の中。皮身の間下腹腹ぶに。筋をも筋納屋に送り。搖殺製せて。商船へ付属やる。大納屋の入口の右方に大別當二人。一人を副指定日屋の者の中より兼役と。汁番ハ。量取とハ。漁二人。表衆廿五人。奥切十四人。内一人を副指定日屋の者の中より兼役と。汁番ハ。量取とハ。漁

油二人。若衆の中より勤役也。不服番。釜番二人。奥江の者兼役也。探番。奥切より兼役して。食物同太郎を改む。

二人。支拂。五人。雇者を加て。都計二百許人。閑暇なきやうに働くゝ苫葺の右方の壁下に小切場。七八十許人並居て。各切桶を前に居。其上に小縄して油皮を懸。それを取細切して桶へ入る。傍に砥石を置時く左へ寄て庖丁を研。小切場の向の壁下の地面より一段低く。竹簀ゞ。奥棚と号て。諸の皮肉ホを切捌こ。其次へ竈十七。後の方ハ竈丈より高く通路を作り石階を登る。例の十七の竈に各大煉釜を居。それへ小切せし油皮を入て。油を煮取なり。釜の前側の。竈の額の所に土塀を塗て竈火の釜中の油へ移さざる防備。その土塀の内面に遮を通し。釜の油を汲入て。油倉に居。又十五六口の大壺の

中

アキ木
別當
アカ身
クロカワ

一同浦小納屋

小納屋入口に天屋にして。奥にし苫葺の假屋を建續き。別當二人。帳役一人。若衆十人。奥切四人。食焚一人。太鼓番二人。若衆の中より動役して。不寝番をする。支配人二人。日雇を加て都計百十許人。暇も多く立舞はしむるなり。此納屋へ取納るし。山の皮。鰭。扇骨。大骨の肉。阿腹。小髭。臓。此以下皆臓中の具なり 喉輪。いろり。ゆさ。うし百尋。子赤腸。大腸。豆腸。臓の身。かみなり。ひめ腸。かつさも。等なり。元鯨も骨皮肉腸いづれも食料なるものなれども。此かつさをのみも食はるるなり。これを奥切者私得にもらるるなれども。ふに用らんも。らべ。そ納屋の入口に帳役座。其奥に小切場あり。二十許居りて。小切をする。大納屋の作法におのづから。右方に奥棚をて。鯨の切揉殺をするなり。その油なるものも油に煮。骨ハ皆肉附たるをもて斧もて削り。跡の骨はみを骨納屋に送り遣はすなり。その奥に竈七をまうけ。大釜を居て。油を煎。鉄の大壺六口に。例の竈額土塀内の樋より流して溜置なり。大納屋の化法はかくのごとし。納屋入口に探番居て。向を卯を咎。竊に隠しもたる肉を捜出す。さいなむこと常なり。また別に筋納屋とて有り。若衆七人。筋こきだ十二人。支配の者一人居て。大納屋より切

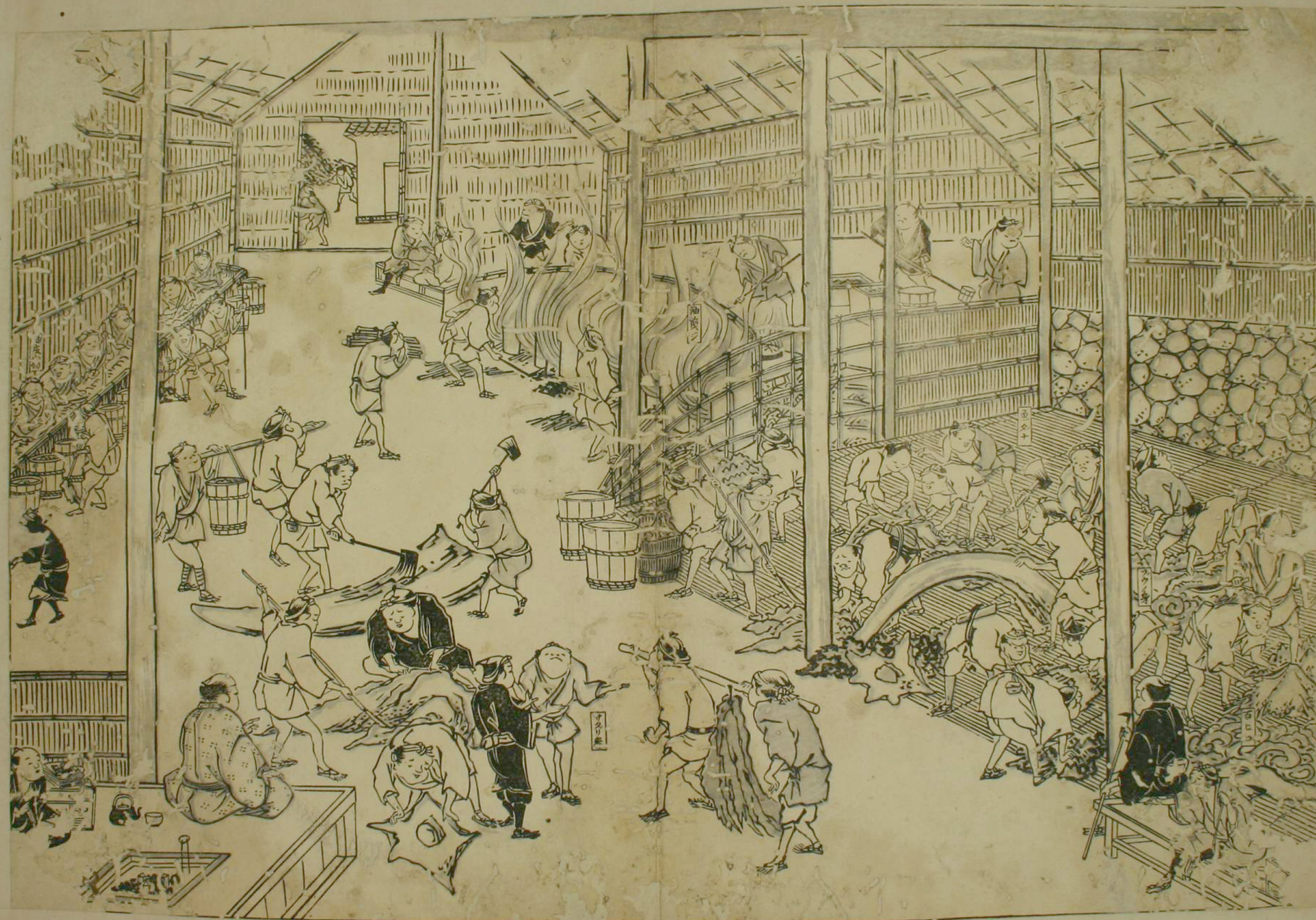
内三合の上下。貝の赤服。谷の皮。などの筋をこきぐ作り

切附る。こきぐ。関東の方言に搔殺るといふに同じ。

カラクス
水ウミ

崎浦豊納屋圖

骨紙屋。八口は瓦葺にして。奥にて苫葺の假舍を建て。別當一人。若衆三人。油掛一人。日傭を加て五六十許人居て。いとゝのみのゝうちは頭骨。臂骨。大骨。阿腹骨。茅都ての骨而已なり。頭骨の心を蕪骨といふ。頭槌之劔 神代紀 鏑矢などの頭の義なり。こゝを千突 八人前などいふもの〜類にて。物を千に切調る見なり千とハ千筋を有るにて。一物を千筋に切りたるいと細きを云詞なり。にて突調。白糸にも紡麻さを。ぬのうちなどの貌に編て突骨とも。ほり〜ともかばけ。調味家味物とあてたゝやせり。又鰭の根竹の處に扇骨とてあり。是も右のごとくして用ふ。ちりこも芒骨にくらべ是やく刷。さて納屋の入口は左方に別當座。次の土間に骨共を山のごとく積揖さる。中に頭骨 ほとゝ神木のさゝ抽して。奥骨ともいわれたり。そこ〜を段切鋸 段切鋸に拘りて。二人向ひて引大鋸 をりゝ方言なり。斧にて割摧く。大骨。阿腹骨。ほとゝ斧や山刀にて打切なり。右方の壁下に小切揚者三十余人並居。例の山刀にて大切なる骨どもをこけ〜 木の切屑をいふ。にてこはたゝなり。どうに刻不桶に入るなり。左方に竈六ありて。大釜をかけ。こけ〜の見にたる骨を潮に和せ。油を煮取て竈の後に例の通路ありて。樋を流し。奥倉に居たる二口の油壺に流しいること。大納屋に同じ。奠粕を白にて搗碎き。を煮只〜再奠せ。粕を骨粕といいて。俵物にして。諸國へ賣肥ゆいとなるべし。神中畑草の肥ゆ。ゆゑなり



生月御崎紙屋場羽指躍図

羽指等が髪のさま。国の者共皆最長し。（方言に髪の事をかばと云ふなり。）そは練捕をり海底にかくして浮出るに。困じて船小来る毫氣力なき形勢を見。船上なる者。髪の束房をとりて引揚るなりとなり。此者共羽指躍とて。一部浦の組出前。佐崎浦の正月九日の夜は組出祝ひ。ごさ組上りの時。通計三度舞をる慣例なり。さに載たるも組上りの時の躍の体なり。一番親父をもてめ。三十人の羽指等。頂にさ[illegible]。鼓を打。雑[illegible]。同音に羽指見[illegible]

[illegible]。[illegible]の輪轆。[illegible]。大笠。巻

[illegible]。[illegible]ノニヤひまもなや。（前段なし。巻之[illegible]）

[illegible]。ろくろをどりとて。輪廻し躍るなり。いびきも相撲取を欺ぶりの益荒雄ぶり。手中を抹額にし。大なる[illegible]ひろげ。大足を踏て。舞かなでくさぐの祝言をいひなやし。

練捕をりの[illegible]なるいとめし。[illegible]

[illegible]にも定まる曲節なりて。堪能。不堪能。[illegible]にやこかるこゝん。[illegible]。物見をする蛮のとらがぬ[illegible]のより[illegible]。[illegible]。[illegible]。[illegible]。